

日本庭園にみる写実と写意

日本庭園は、全体を通してみれば自然風景に立脚した風景式庭園であると云われていますが、時代・様式によってその様相は随分異なります。庭園部会では、平成15年の自沙村荘の庭園に始まり、約50ヶ所の庭園等の見学に行ってきました。

これらの庭園を想い出しながら、時代・様式について少し復習してみましょう。我国で最も早く生まれたのは、池泉庭園です。奈良時代に始まり、平安時代には貴族の寝殿造り庭園としてピークを迎えました。見学した宇治の平等院庭園は、この一連の庭園で浄土式庭園と呼ばれるものです。次に登場するのが、中国文化・仏教(禅宗)の強い影響を受けた枯山水庭園です。西芳寺開山堂の石組(南北朝時代の作。枯山水庭園(?)の最初のもの)をはじめとして室町時代後期から江戸時代初期にかけて多く見られます(大徳寺の龍源院、聚光院、本坊の南庭・東庭等です)。「市中の山居」とも云われた露地(茶庭)は、桃山時代に入る頃から大いに発展します。茶道の進展に伴い、江戸時代には町家、武家さらに寺院の庭園の中にも多く見られるようになります(表千家、武者小路千家の露地は、この様式の典型です)。

そして江戸時代の初頭、桂離宮に始まる廻遊式庭園が登場します(修学院離宮、仙洞御所)。池泉庭園をベースにして、枯山水や露地の要素を取り込んで総合的に集大成した庭園様式です。観賞のみならず、茶会、歌会、宴会に利用され、多種多様な施設・空間で構成された大規模な庭園で、現代に至る我国の造園技術の大半がこの庭園から生まれました。以上の庭園様式の影響を受けて、江戸時代の初期から中期にかけて幾つかのタイプの庭園が生まれます。寺院を中心とする山水築山庭園(滋賀院、律院、竹林院等、一後に民家にも普及)や町家に多くみられる平庭・坪庭(杉本家の坪庭、座敷庭)です。そして、これらの庭園様式は、それぞれ現代に引き継がれていると同時に、互いに影響し合いつつ、ますます多様化しつつあるのが、現在の日本の庭園の状況と云えます。



退蔵院の枯山水

以上、見学した庭園と様式について概略を述べましたが、一口に「自然風景に立脚する」と云っても、具体的で写實的側面が強い池泉庭園等と、「白砂を海に、立石を島に見立てる」等、「見立て」「縮景」の技法を用いて抽象的、かつ写意的側面の強い枯山水庭園(例えば龍安寺の石庭)とでは、様相は全く異なりますし、一つの庭園内でも大規模な廻遊式庭園になると、写實的表現に重点が置かれた空間と写意的表現に重点が置かれた部分の双方が随所にみられることも多々あります。これは、日本庭園にのみみられる特徴と云えますが、こうした自然風景に対する捉え方は、何処からきたのでしょうか? 我国で最古の作庭の指南書であり、現在でも高く評価されている「作庭記」をみますと、冒頭の「心得るべき」とするところに以下のような記述がみられます。



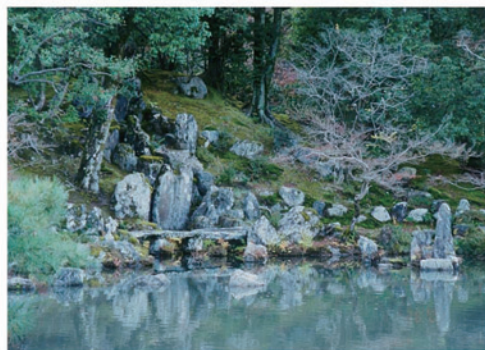
大河内山荘の庭園

- ①「生得の山水をおもわえて、その所々はさこそありしかと思いをよせ・・・」
— 自然の風景に思い合わせて、あそこはこんな風(形)であったと確認して—
- ②「国々の名所を思いめぐらして、面白き所々をわがものになして・・・」
— 各地の素晴らしい風景を思い起こし、印象の深い所を
自分なりに咀嚼して(創意工夫して)—

これによりますと、①では写實的視点を重視していますが、②では写意的視点を重視していると判断できます。即ち双方の視点が大切で、どちらか一方ではないということのようです(龍安寺の石庭は一体何処が写實的か?と云う疑問は残りますが)。

確かに度合いの差こそあれ、全ての日本庭園は写實的要素と写意的要素で構成されていると云っても過言ではないでしょう。観るにつけても創るにつけても写實的視点と写意的視点を同時に持ち合わせて、その場に臨むことが不可欠なことのようです。

写意:30年程前までは辞典(「広辞苑」)になかった用語です。意味を簡単に云いますと「外形を写すことを主とせず、対象の本質または作者の精神を表現する」ことのようにです。



天龍寺の池泉

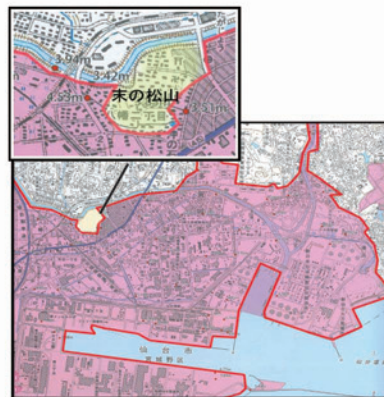
はじめに

契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波こさじとは(清原元輔)

これは、よくご存じの百人一首の歌で、「約束したよね。互いに涙で濡れた袖をしぼりながら、末の松山を決して波が越さないように、行く末までも心変わりすることは絶対に無い」という意味です。ここに出てくる「末の松山」は、今の宮城県多賀城市にあり、平安時代初期の貞観地震の際に大津波が越さなかったことから、「あり得ないこと」、さらには「決して変わらないこと」の歌枕となったとされています。下図の大津波被災地図を見る限り、「末の松山」の一角が浸水被害を免れています。「末の松山」は歌枕として読まれることで、津波の記憶を風化させない記録の機能してきた、と考えられます。この点を検討し結果を学問的裏付けがありませんが推論としてまとめました

1. 貞観地震と政府の対応

貞観地震は、平安時代前期の貞観11年5月26日(グレゴリオ暦869年7月9日)に起きた、陸奥国東方沖海底を震源域とするM8.3以上の巨大地震でした。延喜元年(901年)に成立した史書『日本3代実録』に記されたところでは、『5月26日20時、陸奥国で大地震が起きた。流れる光が昼のように照らし、人々は叫び声を挙げて身を伏せ、立つことができなかった。ある者は家屋の下敷きとなって圧死し、ある者は地割れに吞まれた。驚いた牛や馬は奔走したり互いに踏みつけ合い、城や倉庫・門櫓・牆壁(築地塀)などが多数崩れ落ちた。雷鳴のような海鳴りが聞こえて潮が湧き上がり、川が逆流し、海嘯が長く連なって押し寄せ、たちまち城下に達した。内陸部まで果ても知れないほど水浸しとなり、野原も道も大海原となった。船で逃げたり山に避難したりすることができずに千人ほどが溺れ死に、後には田畑も人々の財産も、ほとんど何も残らなかった』(ウィキペディアによる)となっており、今回の東日本大震災と酷似していたことがわかります。



資料出展：東日本大地震津波詳細地図
(古今書院) ピンク色が浸水範囲

当時の日本の人口は600万人、今の人口の1/20ほどです。千人の津波死者は、単純に20倍すると2万人となり、今回の死者・行方不明者2万人弱とも重なります。

さて、貞観地震に対して中央政府は、『日本3代実録』によると9月7日(10月15日)従五位上の紀春枝を陸奥国の地震を俟する使に任命し、調査隊を現地に派遣します。地震後の混乱、夏の疫病の危険性等を考えると、結構早い現地への対応だったと思います。そして、同年10月13日(11月20日)には、清和天皇が詔を発して、地震や津波の被害にあった陸奥国に対し、税金(租・調)を免除し、自活出来ない者には食料を支給します。その後も継続して神社などへの祈願を続け、翌年には陸奥国修理府に新羅人の瓦工等の職人を配置したことも記録されています。地震から1年後によりやく復興省が立ち上がった今回の地震に比べても、当時の中央政府は、震災復興に機敏に対応しています。

2. 能因法師から松尾芭蕉まで

歌枕に話を戻すと、ノートルダム清心女子大学片岡智子教授(社叢学会理事)によれば「歌枕とは和歌に用いられる由緒在る地名のことで、歌語(かご)として使われ、その背景には土地への信仰、すなわち古事記以来の『くにぼめ』の伝統がある」そうです。そして地名の歌枕は、歌や物語で場面として繰り返して登場する中で、その風景から離れたイメージが形成されいき、たとえば「吉野山」は桜、「龍田川」なら「紅葉」、となって、それがやがて5音の枕詞になり、あしびきの「山」、たらちねの「母」、というように、用法も固定していく。「末の松山」も、波の越さない、変わらないことの象徴として詠まれることとなります。最初にあげた清原元輔の百人一首の歌は、貞観地震から100年後に歌われました。そのころ都では、「末の松山」といえば「波が越さない」と誰もがこたえるほど、定着した歌枕であったと思われます。

さて、現在は数本の老松がかろうじて残っているだけの多賀城市の「末の松山」。文献記録には何も残ってない「末の松山」の津波伝説を、一体誰が流布継承していったのでしょうか。ここで能因法師が登場します。彼は26歳の時出家し、ことに陸奥旅行での作「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞふく白河の関」は有名です。そして、旅先でいわば歌枕の鑑定を行い、『能因歌枕』を編集し、これが歌枕の普及浸透につながったものと考えられます。でも年代的には清原元輔よりも若い能因。彼の功績は、よく使われる「末の松山」が実在し、正しい意味を持つかを検証したこととあり、歌枕の正当性を権威づけた、というところに価値があると思うのです。風変わりな遁世の旅歌人であった能因法師。彼の生き様がのちに西行・芭蕉などに大きな影響を与えたことは有名で、「末の松山」には西行法師が訪れて歌を残し、そして芭蕉は奥の細道に「末の松山」を訪ねたと記しています。

こうして「末の松山」は、著名な歌枕として、また防災上の教訓としても後世に伝わったと思われます。美しい風情のある風景を結晶化した多くの地名歌枕群にあって、警鐘的な意味も持つ「末の松山」の位置づけは特異です。ここに、災害の教訓を風化させないための日本的な文化配慮を感じたのは私だけではないと思います。しかしこの教訓が、現代のまちづくりに十分に活かされなかったことは残念でした。



写真：末の松山の今

糸谷 正俊

仙人の住み処、仙洞御所に入ると爽やかな涼風。参観はたおやかな三層の屋根の大宮御所の御車寄から始まる。その南庭、松竹梅の庭に、枝条豊かな赤松が否が応にも目を引く。恰も人手が入っていないような剪定を施し、樹の生来の姿を求める「御所透かし」はこの赤松だけでなく、常緑落葉を問わず、御所内の雅な庭造りの一翼を担っている。

築地の塀をくぐると芝生で押さえられ汀ラインのやさしい北池に出る。この池の回遊にはいる前に、少し南に足を戻す。今出川御門内から移築された近衛邸の茶室、又新亭を横目に南池に出る。池の奥のほうに切石と野面石を軽快に組み合わせた出島の汀線に石組みが見える。この庭に小堀遠州の名が出る所以でもあり、その作風の面影を残すといわれる。紫衣事件など、度々に徳川幕府の諸事への干渉圧迫に憤り退位された後水尾上皇のために寛永7年12月に新造されたこの仙洞御所。遠州は、寛永11年(1636)から13年にかけて作事奉行としてこの仙洞御所の造営、作庭に関わっている。徳川、豊臣、皇室…さまざまな確執の中、慶長20年大阪夏の陣による豊氏の断絶、大阪城内通の嫌疑で茶友の古田織部を失うが、遠州好みの茶と作事での交友に守られ、徳川、京都所司代の圧力を感じながらも御所の作事に没頭したといわれている。現存はしないが当時の図面に見られる東側の二重の築地塀に囲まれた幅13mの水路など作庭に謎も多い。特に東は鴨川、秀吉の御土居と併せ平城の要塞めいている。池を囲む高低差のある直線護岸は外からの干渉を避け守る意味合いを強く感じる。大宮御所を含むこのあたりは秀吉の正室北政所、高台院の屋敷跡地でもあり、まさにそれは城郭風邸宅でもあったともいう。宮内庁書陵部に残る当時の作庭資料など時代を追って庭の形が変わる。皇室は政治の場から追放され芸能芸術の場に封じ込められる。七度の火災と歴代上皇により庭に手の入るのも当然のことかもしれない。今ここまではっきりと見せつけられるのも珍しい。庭の変貌は1647年遠州の死後、後水尾上皇は修学院円照寺に文智女王を訪ね、はや修学院山荘の構想に入ることに伺える。そして1661年万治4年に両御所が火災焼失を機に、64年に御所拡大に伴う庭園の大改修が行われる。この時点でもう明らかに遠州の庭ではなくなっている。その後延宝6年7年(1678年、79年)に東福門院、後水尾上皇と相次いで崩御。霊元上皇の時代の汀線の資料は残っていないが池の拡大が行われる。1733年享保18年の図面に州浜と思われる小石敷きの記載がある。また、この州浜は世に言わせた載がある。また、この州浜は世に言わせた「一升石」で、光格上皇(1817-1840)が院政を開かれた際、京都所司代の要職にあった小田原藩主大久保忠真公が、湯河原町吉浜(当時は吉濱村)の海岸から、3寸から4寸の長楕円形の石を米一升与えて集め、それを真綿に包み2千俵(約11万個)を海路京都まで運び献上したと伝えられる。1746年延享3年仙洞御所庭園(南池)と女人御所庭園(北池)が掘割で繋がる(今の紅葉橋は大正の作)。



遠州作庭の意匠が残る 汀の石立て

和歌山出身の芥川賞作家辻原登の小説「花はさくら木」は宝暦11年桃園天皇の御代、上皇不在期、女人御所は帝の実母青綺門院の時代。北庭の船着場から智子内親王が掘割を抜け八橋(当時は木橋、明治28年頃石橋に架け替え)を潜り抜け、醒花亭への短い船旅をすところから始まる。「仙洞御所の庭は世界一美しい」と文中で評している。実はこの醒花亭、天明の大火で御所とともに炎上しており、現存のものは1808年文化5年後桜町上皇により再建されたものである。入側の額に李白の「醒花影雲飛」が詠める。

桜の馬場、石浜地に沿って又新亭と、二つの大池巡りを振り返り、波乱から太平の江戸期を通じての庭から宮廷の歴史を垣間見、謎解きの実感を味わえる。

繁村 誠人

韓国の園めぐり

この四月、韓国縦断旅行を試みた。まずは日本の地図には唯一のカタカナ表示のソウルに到着。春とはいえ寒風吹きさす釜山江を渡り、近年市民の憩いの地に改造された仙遊島公園を訪れた。冬空の日暮れ時の公園で見かけた人は二、三人。旧浄水場の施設を残して水と自然をテーマに整備された処である。揚花大橋の入り口から温室、展示館そして緑の柱の庭園、水生植物園、時の庭園に円形広場と続き展望台となり仙遊橋で、地下鉄仙遊島駅につながっている。梅も桜も蕾が固く、サンシュユだけが黄色い花をつけていた。重たげな反り屋根の仙遊亭からの北漢山を背にした首都の眺めも寒々としていた。

次の日は、景德宮の後苑の参観であった。山間に楼、亭、閣と池が代々の王によって建造された苑地で、花見に宴、釣りに狩り、学問や科挙の試験も行はれた。方地円天を表すという美容池と宙合楼、蓮の花をめぐる愛蓮池と倚斗閣、士大夫の屋敷を模した演慶堂、日帝によって異形の池に改良されたという観瀾池、そして流觴曲水が催された玉流川の園へと園地が続いている。それぞれが時代を追って造られてきたとしても、丘陵と樹木で隔てられて、独自の雰囲気を感じた。大阪の花の万博に出展された韓国庭園の原形が美容池だと確認した。

翌日、高速鉄道に乗り論山で降りて車で扶余へ。むかし百済の都であった。新羅に滅ぼされた百済の再興を図って日本軍が戦った白村江が街の北西部を流れている。街の南端に韓国最古の庭園といわれる宮南池がある。四つの池を掘り、蓬萊、方丈、瀛州の三つの島を造り、シダレヤナギを周囲に植えたとされている。今は、中島に韓国らしい休憩所のある池を中心に蓮の花びらの形の蓮池が取り巻き、花の咲く七月にはお祭りをするとのこと。池を一巡りして扶余蘇山へ。百済滅亡の時「三千官女、花のごとく落つ」との伝えのある落花岩の上にある百花亭まで登り、白村江の河岸まで下って船に乗って街に戻った。

四日目は、新羅の古都慶州へ、目指すは雁鴨池の庭園。百済と高句麗を滅亡させても、残る友軍だった唐の排除に余念のなかった笏の文武王が造らせたのだ。近年の発掘調査の成果に基づいて復元されたからである。池の護岸は切石積、臨海殿の一連の建屋のあった南西岸は建物に合わせて線状に対岸より一段と高く積まれている。向かい側の造景への俯瞰を意識したものであろう。対岸は出入りの大きい護岸の内に中国の巫山十二峯を模した小山が起伏をつくり所々に石組みがあり、池には三つの島が浮かび、松林を背にカラミツバツツジと思しき灌木が楚々として色を添えていた。苑林を抜けた所にあった水の取り入れ口の石造が飛鳥の酒船石を思いおこさせてくれた。この夜のホテルの食事には失望したが、翌朝の延々と走る桜マラソンの人の波には圧倒された。

清水 正之

平成14年9月10日に当センターが設立してから、今年には10年になりますので、各部会毎に計画を立て23年度から記念事業を進めてきました。

緑化部会では府道に街路樹を植栽する大阪府マイツリー事業に参加することになりました。当センターは大阪中央環状線の門真市内にクロガネモチと松原市内にシラカシ各5本づつ、藤本基金から吹田箕面線の豊中市にサクラ5本づつ、一本当たり3万円の寄付をしました。それぞれの木の樹名プレートにメッセージをつけております。



中央環状線(門真)
クロガネモチ

中央環状線(松原)
シラカシ

中央環状線(豊中)
ソメイヨシノ

なお、研修部会と国際部会の合同で、中国黄土高原ツアーを平成24年6月3日から7日まで催しました。前川久行理事を団長として、大同市で行われている「緑の地球ネットワーク」緑化プロジェクトを視察し、雲崗石窟などを見学しました。



大同 植林地



雲崗石窟

ホームページのお知らせ

服部明世理事の投稿記事「古都における世界遺産」追加更新しました。

■『古都における世界遺産』 服部 明世
清水寺／仁和寺／梅ノ尾山高山寺／醍醐寺

引続き会員の皆様の掲載依頼を受付けておりますので、どうぞご利用ください。

<http://www.klrs.org/>

国際造園

検索

平成23年6月21日午後4時から、パノラマレストランにて平成23年度通常総会を開催した。

正会員67名のうち過半数42名の出席となり、本総会は成立し、清水理事長を議長として、提案された平成22年度事業報告および決算報告書、平成23年度事業計画案および収支・支出予算案ならびに総会議決事項の委任は原案のとおり可決された。

総会終了後、日本庭園研究センター所長尼崎博正理事より「庭園文化」についての講和があった。

事務局だより

□新入会員のご紹介

友の会 田中 綾乃

□ご寄付・賛助金

次の方々よりご協力頂きました。有難うございます。

故 藤本 富子 1,150,000円

<ご入会の案内>

当センターは都市緑化への協力に努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会、見学会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方へ、主旨にご賛同の方はぜひご参加ください。

	入会金	年会費
個人正会員	10000円	10000円
団体正会員	50000円	30000円
賛助会員	30000円	20000円
友の会	免除	3000円

<ご寄付のお願い>

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆様のご支援を賜たく、ご寄付をお願い申し上げます。

編集後記

最近、自分の漢字力が著しく低下していると実感いたします。パソコンの使用からはじまり、スマートフォンやipadのようなタブレットなど便利な道具が増えたことが影響しているのは確実。不便であるが故の利を今だからこそ考える必要があります。とはいっても、便利になれると離れるのは大変つらいものです。

漢字力について、もうひとつ辛いことがあります。幼稚園など最近の子供たちの名前です。フリガナがなければ読めないこともしばしば。さて以下の名前読めますか？ (馬場)

①煌介 ②剣渉 ③皓稀 ④温乃 ⑤唯愛

⑥唯愛 ⑦唯愛 ⑧唯愛 ⑨唯愛 ⑩唯愛 ⑪唯愛 ⑫唯愛 ⑬唯愛 ⑭唯愛 ⑮唯愛 ⑯唯愛 ⑰唯愛 ⑱唯愛 ⑲唯愛 ⑳唯愛 ㉑唯愛 ㉒唯愛 ㉓唯愛 ㉔唯愛 ㉕唯愛 ㉖唯愛 ㉗唯愛 ㉘唯愛 ㉙唯愛 ㉚唯愛 ㉛唯愛 ㉜唯愛 ㉝唯愛 ㉞唯愛 ㉟唯愛 ㊱唯愛 ㊲唯愛 ㊳唯愛 ㊴唯愛 ㊵唯愛 ㊶唯愛 ㊷唯愛 ㊸唯愛 ㊹唯愛 ㊺唯愛 ㊻唯愛 ㊼唯愛 ㊽唯愛 ㊾唯愛 ㊿唯愛

NPO法人 国際造園研究センター

〒530-0047 大阪市北区西天満4-5-5 マーキス梅田 201号

TEL/FAX : 06-6363-3374